

天知る地知る吾が知る

上うえ 廣ひろ 榮えい 治じ

夏の盛りを実感するある日、ふと空の色と影の濃さが一変して感じられる瞬間があります。秋立つ日、立秋はそんなふうには、盛りの中に新たな変化の兆きざしとして現われます。この忍びやかに訪れる秋立つ日を感じ取ったときの感慨かんがいは、古くから日本文芸の特徴的な主題の一つになってきました。

例えば『古今和歌集』には、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞ驚かれぬる」(藤原敏行とじゆき)とあり、それから七百年余も後に「秋立つや何に驚く陰陽師」(与謝蕪村よせぶそん)などの句があつて、いずれも夏の盛りに感得かんとくする秋の訪れに、新鮮な驚きを歌っております。

わが会もまた、五十年という大きな節目を越えて、今、夏の盛りにあるといえるかもしれません。ということ、誰も気づかぬうちに、秋の訪れを迎えているのかもしれないのです。それが大いなる実践の実りの秋であるのか、はたまた厳しい冬の前触れとしての秋であるのか。いずれにしても、私たちは常に自分たちの心と実践が、いかなる位置にあるかについて、鋭い「気づき」を働かせねばなりません。

私たちの実践が何処へ向かっているのか、そして今、私たちはどの地点に立っているのかをしつかりと知って、倫理に照らして身を正すこと、これが実践の第一義であろうと、私は痛感しております。

さて、今年の前半は、まことに慨嘆すべき不祥事が連続して報道されておりました。例えば官僚の腐敗、事故隠し、金融機関の不正融資などなど、まことに非倫理的な情けない出来事の連続でありました。そしてその都度、不祥事の当事者は「私は知らなかった」と言い訳をいたします。しかし、かりにそうであったとしても、「知らなかった」ことにも責任があったはずで、かりそめにも、社会的に影響の大きな組織の責任者であるならば、自分の所轄の事項はしつかりと知り、倫理に悖らぬ判断をして、道を正すべき義務があるはずで、「知らなかった」ですむはずではないのであります。

思うに、大銀行などの場合には、バブルに浮かれて、夏の最中に進行した冷え冷えとした秋冬の訪れに気づくのが遅れたのでありましょう。しかし、いつかはそれに気づいたはずで、そして、それに気づいた後の判断と行動をこそ誤ったのです。

社会的な責任を問われるような事態が進行していると知った後に、それを隠し糊塗し責任を逃れようとした、そのことこそが問題なのです。悪事も善行も、隠し通すことはできないものだ、私は確信しております。ことわざに「天知る地知る吾が知る」と申します。人は誰も知らないと思われることでも、天と地と、そして何よりも本人自身が知っているのです。

悪事を自ら知りながら、それを隠し通そうとするとき、彼の心と行動はいっそう醜く歪みます。一つの隠しごとが次の隠しごとを生み、さらに無数の隠しごとに連鎖してゆき、彼の心は隠しごとに取り巻かれて、煉獄の炎に焼かれることになるのです。

『レ・ミゼラブル』の主人公ジャン・バルジャンは、自分の過去を隠さんがために、善行を為す自由も

奪われ、ついには愛する養女コゼットの幸福な結婚まで拒絶せざるを得ないところまで追い詰められます。しかし、彼の人知れぬ善行と崇高な魂は、執拗に彼を追う警視ジャベルの心をも変えるのです。善も悪も、やがては世に現われるということを、この小説は語っています。

秦の始皇帝を王位につけた宰相呂不韋は、始皇帝の母太后との密事を隠すために、太后に性的な異能者を勧め、ついには、クーデターに連座することになってしまいました。呂不韋が残した『呂氏春秋』を見れば、彼が徳による政治を目指した理想主義者であったことがよくわかります。ただ太后との密事を隠すことにこだわったばかりに、彼の理想の実現はおろか、その身までを滅ぼしてしまつたのです。

ジャンバルジャンと呂不韋との違いとは、旧悪を乗り越えようと努力した者と、旧悪を糊塗しようとして悪事を拡大してしまつた者との差異なのです。一方は市長にまでなつた身を捨てて、善に邁進しようとし、他方は宰相という地位を守らんとして、より大きな悪の端緒を開いてしまつたのです。そして、一方はやがてその善が世に現われ、他方はその悪が知られるに至つたのです。

重ねて申しますが、私たちの為しごとは、やがては世の知るところとなります。しかし、大切なのは、それが世に現われる前の段階です。まだ誰も、私たち一人一人の善も悪も知ってはいない、ただ天と地と吾だけがそれを知っている段階。その時点で、私たちが何をしようとするのか、これが大切なのです。「閑居して不善を為す」のは「小人」です。少なくとも倫理の人たんとする者は、閑居してこそ善を為さねばならぬのです。

例えば、会友諸賢は会においてそれぞれの立場におられます。はたしてその立場にふさわしい前向きの実践を行なっているかどうか。「せよ」と言われたことはしていますが、はたして日々新たな決意に基づいて自己の責任を全うしているかどうか。はたまた、生活のあらゆる場面で「気づき直行」が実践で

きているかどうか。もしかりに、否であつたとしても、誰もそれを知りません。しかし、天と地と本人だけは、日々の実践がおろそかになり、惰性にながれていることを知っています。

さて、そうしたとき、彼は「自分の知つたこと」に対して何を為すべきなのでしょう。その為すところによつて、彼はジャン・バルジャンにも、呂不韋にもなることができます。たとえ彼が、どんな高邁な理想を抱いていても、今行なうべきことを怠れば、彼は理想に近づくことはできません。気づいた過ちは即改め、自律的な実践に移らなければ、より高処へ至ることなどできないのです。むしろ、現在の惰性的な日々には足を取られ、自分の立場を守らんがために、自らを偽る可能性すらあるのです。

どちらの方向を選ぶのも、本人の決意のままです。天と地と、そして本人だけしか知らないことは、本人が天の意を思い、地の声を聞いて自らを律するほかはないのです。ここでいう天の意とは「大自然の摂理」のことです。人間を含めたすべての事象を動かす天の理法です。地の声とは、地に暮らす人々の声です。大自然の摂理に基づいて形成された人としての「倫理」です。つまり、実践倫理を道標として、「自分だけが知つていること」をどう解決するかを自ら定めよ、ということなのです。

今、一見夏の盛りにあるかの如き私たちの会にも、惰性や奢りや動脈硬化という、厳しい秋冬がしのび寄つている可能性がないとはいえません。会の五十年という節目が、ようやく兆した希望のときであるのか、停滞衰退の前の盛りであるのか。また、来るべき季節を大いなる実りの季節とするのか、凍てさびた季節とするのか。すべては私たち一人一人の今日と明日の実践にかかつております。

私たちが今何をするのか。その結果はやがて世に現われるところとなるでしょう。「今をこそ専一に勤めよ、自律的な実践に精進せよ」と、私は自ら誓い、皆様もともに歩まれることを期待したいと思います。それこそが、わが会の次なる五十年百年を築くこととなると確信するからです。